

教育委員会

コラム Vol.18

教育長室の窓から

知は力なり



「知は力なり」、誰の言葉かご存知でしょうか。私も言葉は知っていましたが、詳しくは知りませんでした。

フランシス・ベーコン（16世紀から17世紀にかけて活躍したイギリスの哲学者、法律家、政治家、科学者であり一つの枠に入らない才能をもった人物）が残した有名な言葉です。意味は「学問の目標は、地位や名声を得ることでも、威張ることでも、誰かを言い負かすことでもない。本当の目標は、人類の未来を変えるような、発明と発見にあるのだ。」それが「力」だと唱えています。そこで、ベーコンが主張したのが、「観察と実験」の大切さでした。データ（観察と実験）を重視する新しい「知」の方法、事実を踏まえて、理論や結論を導き出す考え方は「帰納法」と呼ばれ、近代科学の基礎となりました。

ところで、教科等などの「知」の総合化と実践化を図る本町のSTEAM教育（アナログ）の柱とし、各小中義務教育学校や地域の特色を生かした活動を行っています。体験活動は、子どもたちが身体全体で対象に働きかけ、関わっていく活動です。対象となる実物に実際に関わる「直接体験」のほか、ICTなどを介して感覚的に学ぶ「間接体験」、シミュレーションや模型などを通して模擬的に学ぶ「疑似体験」などがありますが、本町では、ヒト・モノや実社会に実際に触れ、関わり合う直接体験を重視しています。豊かな人間性、自ら学び自ら考える力など生きる力の基盤、子どもの成長の糧として重要ですので、一層推進してまいります。本町から、未来のフランシス・ベーコンが生まれるかもしれません。

教育長の

ちょっといい話

学校の運動会…



過日の南日本新聞の見出しに「熱中症の予防で初の屋内運動会」という見出しを見つけました。本町の内之浦小学校と内之浦中学校の合同運動会が、銀河アリーナを使用して行われた記事でした。両校は、2018年度から、どちらかの校庭で一緒に運動会を開いてきたが、熱中症予防（室内は25度の設定）、雨天への対応、町内施設の活用などを考え、屋内開催をしたとのこと。案内をいただいた時は「中学生の種目をどうするのだろう」と思いましたが、対角線上にコースを取る「25メートル走」など種目を工夫しながら子どもが主役の運動会となりました。（なお、次年度以降については、子どもたちの意見を参考にしながら、屋内開催を続けるか検討するそうです。）

ところで、日本における運動会の起源は、東京の築地に創設された海軍兵学寮が1874年（明治7年）に行った「競闘遊戯会」とのことです。全国の小学校に運動会が普及するのは、体育教師を養成する体育伝習所が1878年（明治11年）に発足したのがきっかけで、ここで学んだ教師を通じて、運動会が全国で開催されるようになったとのこと。明治中期以降には、運動会も地域の祭りの行事となり、地域の人々が家族総出で弁当を用意して見物に出かけ、屋台なども出るようになりました。



ちなみに、私が教員として勤務していた福島県では、徒競走を「はねくら」と言っていました。「はねる」は「走る」という意味で、「はねくらべ」が「はねくら」となったようです。また、中学校に運動会がない学校が多数あります。鹿児島県に来て驚いたことは、どの中学校にも運動会があることでしたが、本町の中学校の運動会を見て、整然とした行進、気を付け、前にならえ、礼などキビキビした動作など、日頃の学習の成果、それを見た保護者や地域の方々の感動、そして中学校生活の1ページを刻む子どもたちの姿に、運動会の素晴らしさを感じたしだいです。